けんたのおくりもの

あおさえりか　こばやしかな　しみずゆきこ
すずきちはる　ねいしゆりえ　まっざわあずさ

「けんちゃん、きのう にほんの とおいまちで おおきな じしんと つなみが あったんだよ。」と おかあさんが いいました。
「うん、ぼく しってるよ。きょう えんちょうせんせいが はなして くれたもん。」けんたは こたえました。
「じしんで うちが こわれたり、つなみで えほんや おもちゃが なくなった こどもたちが いっぱい いるんだって。 その こどもたちに、けんちゃんの おもちゃ どれか あげて いいかな?」と おかあさんが ききました。
「やだよ。これ みんな ぼくの おもちゃだもん。」おもちゃを あげたくない けんたは、「やだよ、やだよ。」とないて あばれました。

ふと きがつくと けんたは イルカの せなかに のって ぶどういろの うみに うかんで いました。
「ここはどこ?」と けんたは イルカに ききました。
けんたの ほほには おおつぶの なみだが ひかっています。
「けんちゃん わたしに つかまっていれば だいじょうぶ。さあ、わたしと いっしょに いきましょう。けんちゃんの へやに あった ふくろうどけいの ユーリーと いっしょにね。」イルカの ユッコが いいました。

イルカの ユッコに ゆられて、けんたは しらない まちに つきました。
ひろばからは たのしそうな おんがくが ながれて きました。
「けんちゃん、げんきを だして おんがくの きこえる ひろばに いってごらん。」
イルカの ユッコが いいました。
「ありがとう、バイバイ。」イルカの ユッコに わかれを いって けんたは おとの する ひろばに むかって あるき はじめました。

ひろばの まんなかでは こどもたちが たのしそうに うたに あわせて おどって いました。
「どうして そんなに たのしく うたが うたえるの？」
けんたは うたの じょうずな おんなのこの エリーに ききました。
「それはね、わたしの そばに リズミーという ようせいが いるからよ。けんたくんも たのしく うたが うたえるよう リズミーと たびを してみると いいわ。」とエリーはいいました。
「えっ、いいの？ありがとう エリー。」とけんたは いいました。
リズミーと いると けんたは すこし げんきがでて、るんるん うたいながら ひろばを あるき はじめました。

ひろばの かたすみでは たくさんのひとが えを たのしそうに みていました。それは えを かくことが だいすきな アーサーが、まちの こどもたちの かおを かいた えです。

「ぼく こんなに げんきな え かけないなー。」けんたは アーサーに いいました。

すると「ぼくにはね、この まほうの ふでが あるんだよ。けんたくんも げんきに えが かけるように、この ふでを あげるよ。」といって アーサーが ふでを けんたに あげました。

「そんなに たいせつな ものを もらって いいの？」とけんたが きくと

「いいよ、けんたくんも げんきな えが かけるように なるよ。うちに かえったら おえかきしてね。」とアーサーがいいました。

「ありがとう アーサー。」といって けんたは むねの ポケットに まほうの ふでを いれました。

けんたは さらに ひろばを あるきます。

「なんだか おなかが すいて きたな。」と けんたは おもいました。
ひろばには たくさんの ひとが ならんでいる はるちゃんの だんごやさんが
ありました。みんな おいしそうに たべて げんき いっぱいです。

「けんたくん、わたしの つくった おだんご たべてみて。」はるちゃんが
いいました。
「え、いいの はるちゃん？」けんたが うれしそうに きくと
「いいよ。けんたくんに げんきに なって ほしいから。いっぱい たべてね。」
「わーい、ありがとう。ぼく おなかが すいて いたんだ。いただきます。」といって
おだんごを たべはじめました。
「あーおいしかった。ごちそうさま。」けんたは おだんごを たべて すっかり
こころも からだも げんきに なりました。

いつのまにか けんたは うみが みえる おかの きの したにいました。
みあげると そらには ほしが でていました。
けんたは リズミーと まほうの ふでを みながら
「なんで みんなは ぼくに しんせつに してくれたんだろう。」とかんがえました。
「ホッホー それは どうしてだと おもう？」ふくろうどけいの ユーリーが
ささやきました。
けんたは おかあさんに「じしんや つなみで おもちゃを なくした
こどもたちに けんちゃんの おもちゃを あげていい？」といわれて
「いやだ いやだ。」といって ないたことを おもいだしました。

「**そっかー！**
ぼくが かなしそうで げんきが なかったから、エリーも
アーサーも はるちゃんも ぼくが げんきに なるように
しんせつに してくれたんだ。」

「けんちゃん、おきて、ごはんよ。」おかあさんが けんたを おこしました。
「あれ、ゆめ だったのか。」けんたは ねむそうに いいました。
ベッドから おきあがると「ねえ おかあさん、ぼくの おもちゃ あげてもいいよ。」
と けんたは おおきな こえで いいました。
「え？どうして？さっきは あんなに いやだって ないていたのに。」おかあさんは
ちょっと びっくりして ききかえしました。
「ぼくの おもちゃで げんきに なってくれる ともだちが いれば ぼく
うれしいよ。」そういって いま みた ゆめのはなしを おかあさんに しました。
「ありがとう けんちゃん。おかあさん とっても うれしいわ。」
おかあさんは にこにこして いいました。
「この じどうしゃと、ぬいぐるみと、この えほんも あげようかな。」とけんたも
うれしそうに いいました。

こうして けんたの おもちゃと えほんは、じしんや つなみで かなしんでいる
こどもたちに おくられることに なりました。

あとがき

2011年３月11日巨大地震が日本を襲いました。東北の沿岸部はマグニチュード9.0の大地震とその直後に襲ってきた大津波により、壊滅的な被害を受け、たくさんの命と大切なものを失いました。

この現実を前に、長野県短期大学　幼児教育学科３年　造形演習Ⅱで学ぶ私たちに何が出来るのかをみんなで考え相談して、親切な気持ちを分かち合うことで、こどもたちが互いに元気になることを願って、この絵本を作りました。

なおこの絵本は、長野市との幼児防災啓発連携事業として制作したものです。

この本を作った人たち

さく　え　　長野県短期大学幼児教育学科３年
青木絵里花　小林佳奈　志水裕紀子
鈴木千晴　根石ゆり恵　松澤　梓

監　　修　　長野県短期大学幼児教育学科造形研究室　小林亮介
長野市危機管理防災課　山口正樹

印刷製本　　株式会社　信光社

発　　行　　2011年11月